

グローバル資本主義と疎外された公共圏
——内省的理性と公共的理性の弁証法——
大倉 茂（立教大学兼任講師）

本報告の主題は、グローバル資本主義が跋扈する現代社会においてそれに対抗しうる公共圏の構築が困難になっている状況を、内省的理性と公共的理性との対比を通して理性のあり方に焦点をあてて素描することにある。

グローバル資本主義の飽くなき拡大は、単にわれわれの生活のすみずみまで資本主義を行き渡らせるだけでなく、われわれ自身の中にも深く入り込んでくる。グローバル資本主義が、拡大、深化をつづける中で、そのネガティブなあり方が露骨なまでに表出しているにも関わらず、それに対抗しうる公共圏が必ずしも機能しているとは言えない。それはなぜか。そのことを理性のあり方を考えることを通して考えていきたい。

資本主義による物象化によって、人間と人間の関係が、モノとモノとの関係になることで、人間が理性的な関係を持っていないばかりか、過度に内省的になる。人間を孤立させる物象化は、公共的理性を無力化させ、内省的理性を際立たせる。そこで思い出されるのが、デカルトのコギトである。コギトによって導出した思惟実体の能力である理性こそが内省的理性であると言える。なぜなら、自らを自らで疑う過程によって見出された。まさに自らを自らで反省する、すなわち内省によって見出されたのである。コギトに基づく人間の規定が、近代個人主義であるすれば、近代個人主義の理性のあり方が内省的理性であることも確認されよう。近代個人主義という近代における人間の規定は、意識的に、そして社会的に作られ、意識的にも社会的にも個人の独立性が強調される。同時に、その理性のあり方は、公共的理性のあり方を見失い、内省的理性としてある。そのように考えるならば、公共圏を生み出した近代のあり方自体に公共圏を歪めてしまう可能性が内包されていたこととなる。

公共的理性が後景に退いてしまった理性は、内省的理性が前景に出てくることとなる。そのような理性のあり方は、既成のイデオロギーの再生産として現前に現れる。公共圏を人間と人間の理性的なつながりによる自由な言論・活動空間であるとするならば、現代社会において公共圏は構築自体が難しくなってしまうと同時に、ゆがんだ公共圏にならざるを得ない。現代社会における公共圏は、公共性を持たない孤独な理性に基づく、形式的な言論・活動空間に墮している。すなわち、公共圏が疎外されている状況がある。そういった疎外された公共圏をさして、公共圏そのものに対する悲観的な言説もある。

そのような状況下の中で、公共的理性のあり方を前景に出し、内省的理性と公共的理性の止揚を通して、公共圏の疎外状況をいかに突破するかをわれわれは考えなければならないだろう。